

実川 恵子

小式につかはしける

①藤原朝忠朝臣(勤)

70 時（采）しもあれ花のさかりにつらければおもはぬ山にいりやしなまし

【勤物】天曆六年参議 応和三中納言 応保三薨五十七

【朱注】(71朱注参照)

【校異】①藤原朝忠朝臣—朝忠朝臣(久)

※詞書・歌欠(堀片荒)

【語釈】○時しもあれ—他の時もあるだろうに、選りに選ってこの時節に。時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだにこひしきものを(『古今』哀傷839)「時しもあれ秋しも人のわかるればいとど袂ぞ露けかりける」(『拾遺』別308)等のように、凋落の秋と別れの期の重なりを嘆く場合が多い。ここは花を尋ねて山に入る春の折りも折り、冷淡な態度をとる女に、今が山に入り出家する時なのだとそのあやにくさを恨んだもの。 ○おもはぬ山—「思はぬ」には男女の間での「思ふ・思はぬ」の意の場合がある(「かくばかりおもはぬ山に白雲のかかりそめけむことぞくやしき」『齋宮女御集』)。又「予期しない」意で、「法の師と尋ぬる道をしるべにて思はぬ山に踏み惑ふかな」(『源氏物語』夢の浮橋)のようにも用いられ、当歌

に関しても「思はぬ山」といへるは、思ひもかけぬ山、思ひもやらぬ山といふに聞えたり」(『梨本集』)とする解がある。返歌との相関、その他の理由(【評】参照)によりここは「予期しない」意とする。 ○山にいる—世を遁れる(「み吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ」『古今』冬37)。

【訳】小式に遣した、

他の時だつてあるでしょうに、選りに選って人が花を尋ねて山に入る花盛りの今、あなたがつれないものだから、思ひもかけなかつた山に世を遁れて入つてしまおうかしら。

【評】当歌を引歌とすると見做される『蜻蛉日記』によれば、「五日、なほ雨止まで、つれづれと『思はぬ山に』とかやいふやうに、物のおぼゆるまゝに、尽きせぬ物は涙なりけり」「柱に寄り立ちて、思はぬ山なく思ひ立てれば、八月より絶えにし人……」の用例が示すように、「思はぬ」は「物思いをしない・悩まない」の意となる。これを参考にすれば当歌は「……つれないものだから、もの思ひのない山に籠つてしまおうかしら」と解されるが、「返し」の71歌中の「おもはぬ山」に迄は適用できないので採らない。上三句に留意すれば「春の花盛には皆人山に入ることなるが我は君のつれなきによりて、花ゆゑにはあらで思ひもかけぬ山に入んと思ふとなるべきか」と『新抄』が師説として引く所に帰着するであろう。次歌参照。

71 返し
わがためにおもはぬ山のおとにのみ花さかりゆく春をうらみむ(見)

【朱注】合点アリ。「三首本無」ト本文左傍ニアリ。

【校異】①春一人(中)君(荒)

【語釈】○わがために―私にとつて。「―が原因で」に相当する例歌は三代集には検索されない。漢文訓詁体の用法が和歌に馴染まないのは当然であろう。従つて『新抄』が「師云、我ゆるに思ひがけもなき山に入給はば云々」とするのは不適當。本集の全用例(994, 1020, 1043, 1216)に照しても、主体の位置により「私にとつて・私に對して」と訳には相違がでてくるが、ある作用を被る対象としての「我」を示す語とみるのが妥當であらう。○おとにのみ―「消息をよこしただけで訪れもせず」の意に、「実際には見ることなく、花盛りをうわさでのみ知る」意を掛ける。

○花さかりゆく―「花盛り」から「離り」を導く。「さかりゆく春」は、離れて行く男を寓する。

【訳】返歌

(あなたは思いもかけなかつたとおっしゃいますが)私にとつてこそ思いもかけず、山に籠るなどと消息を下さつただけで離れていってしまうあなたをお恨みすることです、思いがけない山に花が美しく咲き盛っていると評判をきくだけの春を恨むように。

【評】贈歌の語句を逆手にとり「私にとつてこそ寝耳に水」と驚いてみせながら、手紙のみで直接の訪問を欠いた男の虚を衝く形で、逆に恨み返したところに詠者の得意がある。又、贈歌が恨みを春の花に絡ませて訴える構造をとるのに対応させて、返歌もこの季に寄

せて恨みの表現を果たしている。このような理詰めに対応に女の側の冷靜さが感知され、逆に男の深刻なポーズとして、贈答の遊戯性の中に浮き立つてこよう。

題しらず

72 春の池の玉もに遊ぶ(ぶ)にほとりのあしのいとなきこひもする(宮道高風)
かな

【校異】①高風―ナシ(片)ちか、せ(荒) ②こひ―かひ(久)

【語釈】○春の池の玉もに遊ぶにほとりのあしの―序詞として「いとなき」を導く。「にほとり」は「かいつぶり」の古名、池・湖沼・河川にすむ留鳥で、泳いだり潜つたりする水鳥。○いとなき―暇がない。例歌として「あはれとも憂しともものを思ふときなどか涙のいとなかるらむ」(『古今』恋五86)・「夜はさめ昼はながめにくらされてはるはこのめぞいとなかりける」(『一条撰政御集』)などがあげられる。○こひもするかな―『万葉』ではすべて「……こひもするかも」(373, 675, 1898, 2275, 2672, 2675, 2741)、三代集になると「……こひもするかな」(『古今』469, 490, 498, 561, 565, 579)、本集72, 647, 671, 674。『拾遺』791, 824)となつて少し変わるが、『万葉』以来の「どのような恋の状態か」を受け

る固定化した言い方(慣用句)である事に変わりはない。また、この型が皆「こひも」であつて「こひを」ではなく、詠嘆の意の「かも・かな」で終止することは、「も」が強意の係助詞として機能していることを示す。しかし、これら各語の機能的効果が、「慣用句」といえる段階となつても、当初と変わらず当時の人々に感受されていたかは、問題のあるところであらう。

【訳】春の池の藻に遊ぶかいつぶりの足の動きが絶え間ないように、

心の安まる時もない恋をすることよ。

【評】当歌は、序で抽出されるのどかな春景と対照されて、恋する者の内面が表わされている。また第四句までの叙景部に閉しても、第三句までが水面上に遊ぶ鳩鳥の姿、第四句が水面下に隠れた所作、と一応の対照を見せており、あるいはこれは人事の譬え——恋する者の内外両面の暗示——としての読みを促しているのかもしれない。なお、「鳩鳥」は『万葉』以来歌材として用いられているが、その大部分は鳩鳥自体の属性（潜水・番）あるいは水鳥一般としての属性を利用して枕詞・序詞に使われるのであり、「鳩鳥」自体を詠物（対象）として詠むことは少例である。従ってこの鳥に對し特殊な観念が付託された形跡はない。また当歌は、本集では春に収められているが、『六帖』は「恋」の題のもとに配置し、歌の内容上それが適正な扱いであることからみても、本集の部類の杜撰さが窺い知られる。

寛平御時、花の色霞にこめて見せずといふ心をよみてたてまつれ、とおほせられければ
藤原興風

73 山風の花のかかとふふもとは春の霞ぞほだしなりける

【朱】む

【校異】①御時—御時に（久） ②色—色は（久雲堀荒） ③見せず—みえずとも（堀） みせずとも（荒） ④心を—心はえを（久）心（片） ⑤よみてたてまつれ—ツカウマツレ（片） ⑥おほせられ—あり（中堀） おほせあり（久） ハヘリ（片） ⑦かとふ—さそふ（荒）

【語釈】○花の色霞にこめて見せず—『古今』春下91「春の歌としてよめる 良岑宗貞 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ

春の山風」を指す。「花（の色）」は「こめて見せず」の目的語であるが、『古今』の排列からすると「春の花」で名を特定できない。「こめ」は他動詞下二段活用連用形で「閉じ込める」意。主語は判然と示されず、「春」とも「春霞」とも考えられるが、後者とするのが正しい（114参照）。○心—趣意。具体的には、霞は花を人目から隠す・風に香を盗ませる、という発想や霞・風の擬人化（修辭）、春花を賞す風流心などの総合されたものを指し、それらを抽象的に「心」といったと考えられる。例としては、同じ興風の『古今』秋下30の詞書「寛平御時、古き歌奉れ、と仰せられければ、龍田川もみぢば流る、といふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりける」が指摘できる（58/66参照）。○かとふ—平安諸文献に殆ど用例を見ない語だが、『新撰字鏡』は「詵」（①いざなう②いつわる、意）を「加止不」と訓ませ、また「勾引」（①引き寄せる②誘拐する、意）を「加度布」（「度」は用字法からすれば清音）と訓ませる。また平安未成立した『名義抄』は「誘」を「カトフ・サソフ・アサムク」と訓ずるゆえ、「かとふ」の意は①いざなう②だまして連れて行く（かどわかす）、に収斂する。従って当歌が宗貞の「香をだにぬすめ春の山風」に答えた趣が窺えることから、「かとふ」は「かどわかす」意にとるのが妥当と言える。なお、鎌倉時代に下ると、『海道記』や『とはずがたり』等に用例が見出されるが、右の両意を出ない。○ほだし—心や行動の自由を束縛するもの（「あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ」『古今』雑下98）。

【訳】 宇多天皇御在位の時、霞が花の色をその中に閉じ込めて人に見せない（ようにしようとも、せめて香だけでも盗み取れ、春の山風よ。）という歌の趣意を詠んで献上せよ、と帝がおっしゃったので、

山風が花の香をこぼ巧みに誘って連れ出そうとしている麓

では、春霞がそれを引き止めているのだったよ。

【評】帝から興風に呈示された宗貞の歌と当歌を比較すると、両歌の表現内容である「春花を賞す」、氣持を表わす点に強弱の差が見られるが、他の修辞や発想に関しては同じ類のものであって、結局、同一内容を同じ技巧を用いて詠んだ歌、ということになる。これに類する例としては、語釈に於いて例示した同じ興風の歌、

寛平御時、古き歌奉れ、と仰せられければ、龍田川もみちば流る、といふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりける、

み山より落ちくる水の色見てぞ秋は限りと思ひ知りぬる（『古今』秋下310）

と、右詞書中にその一・二句が示されているよみ人しらすの歌、

龍田川もみちば流る神奈備の三室の山に時雨降るらし（『古今』秋下284）

を比較した場合にも言えよう。また、当歌詞書に示されるように、帝は興風のこのような手腕を認めており、且つ右『古今』秋下310のように自らも自発的に詠んで奉ったりしている点からみると、興風の歌人としての自負心は相当なものと推定できる。

74 春さめの世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそおもへ
① 題しらす ② よみ人も
③ 春さめの世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそおもへ
④ ⑤ ⑥ ⑦

【朱注】しらす

【校異】①題しらすナシ（堀）たいよみひとしらす（荒）②よみ人もよみ人しらす（中久雲堀）ナシ（荒）③春さめの春の雨の（堀）④ふりにたるふりにける（久）降わたる（堀）⑤もーは（荒）⑥あたらしくアトラシキ（片）⑦花ーミ（片）

きみ（荒）

※片仮名本は当歌の前に56が、「題読人不知」として排列されて、その次に74が和歌のみ記される。

【語釈】○春さめの「ふり」にかかる枕詞。○ふりにたる心

「（春雨の）降り」が同音の「古り（古くなる）」に意味転換し、老いによる感性の衰えを言って歌内容を規定していく。下句の「あたらしく」とことばの遊びとして対照をなす。○世に「世の中」の意と「非常に」の意をかける。○あたらしく「そのままにしておくのは惜しい程すばらしい」意（「玉鬘ハ」廿ばかりになり給ふままにととのひはてて、いとどあたらしくめでたし』源氏玉鬘）。

【訳】世を暮らしてこんなにも歳をとり感性の衰えた我が心であっても、やはり、散った惜しいと思う程春の花をすばらしいと思うことです。

【評】『古今』春下113小町の歌の「わが身よにふる」は容貌の衰えを、当歌の「世にふりにたる」は感性（心）の衰えを言っている。つまり、当歌はそれによって春花の美しさを表現しようとしたのであって、同じ春花を扱っていても人事に比重を置く小町の歌とはその点で異なる。なお、「あたらし」は『新抄』の指摘（「田にむかへて新の詞を趣向とせるにはあれども。そは詞のあやのみ」）どおり、意はあくまで「惜し」で解すべきである。

75 京極のみやすん所におくり侍（り）ける
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

【校異】①んーナシ（久荒）②おくり侍りーつかはし（中久）夕

テマツリタマヒ(片) ③は—か(久) ④かり—鷹(堀) ⑤かはる—かへる(久雲堀片)

【語釈】○京極のみやすん所—時平二女、藤原褒子。宇多天皇妃。延喜年間、所謂京極御息所褒子歌合を主催。本集には1120に出家の記事が見え、また宇多院崩御を悼む歌が145に収められる。○はる霞たちて—春の訪れを言い表わした語句だが、同時に「たちて」に

「渡来していた雁が飛び立つ」意と、【評】で述べる如く褒子と元良親王とのかわりを考慮に入れると、「里下りしていた御息所が里をあとにする」意と持たせている。○くもるになりゆく—「くもる」は「空」(「船浮けてわが漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに」『万葉』卷二220・「山高み雲居に見ゆる桜花」『古今』賀38)及び「宮中」(「わざとの御学問はさるものにて、琴・笛の音にも雲井を響かし」『源氏』桐壺)の両意を表わし、従って「くもるになりゆく」は「雁が空遠く飛び去る」意と「(御息所が)参内する」意とをかける。

○かりの心—「雁の心」の他に「仮初めの愛情」を言い、御息所と作者とに交情のあったことを暗示している。

【訳】 京極の御息所に送りました、

春霞がかかる時期となり、雁が空遠く飛び去っていくのは、その心が変わったからなのでしょう。

(春になるとともに、貴女が宮中にお戻りになるのは、仮初めに思いを寄せて下さった貴女の心がお変わりになったからなのでしょう。)

【評】一首全体を寓喩と解したのは、帰雁を詠んだ歌とした場合、詞書と歌とに距離があつて必然性に欠けること、また本集91「事いできてのちに、京極御息所につかはしける もとよしのみこ わびぬれば今はたおなじにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ」によつて、里下り時に於ける京極御息所と元良親王との関係が明らか

であり、当歌の作者に元良親王との関係が明らかであり、当歌の作者に元良親王を擬する可能性が十分にあるゆえ、寓喩と解するのが妥当とみたのである。

題しらす

76 ねられぬをしひてわがぬる春の夜の夢をうつつになすよしも
がな(歌)

【朱注】見る

【校異】①なす—みる(堀片荒)

【語釈】○ねられぬを—「音にのみきくの白露夜はおきて、昼はおもひにあへず消ぬべし」(『古今』恋一470)・「起きもせず寝もせず夜を、あかしては春のものとながめくらしつ」(同恋三616)などから明らかなる如く、寝られぬ原因は恋の懊惱と了解される。○よしもかな—「よし」は「方法・手だて」の意。「もがな」は願望を表わす終助詞であるが、特に「実現不可能なことを願う」意が顯著である。

この二語が結び付いて「動詞+よしもがな」(……する手だてがあつたらよいのになあ)、という慣用句を形成する。『古今』では347 683 697 1000 1038に、『後撰』でも76 135 320 417 701 947 1164にその使用例が見られる。

【訳】叶わぬ恋で寝つかれないのを、無理にも眠り見た春夜の逢瀬の夢を、現実のものにする手だてがあつたらよいのになあ。

【評】当歌は、「夢」を「現実」に対比し、且つ「もがな」という実現不可能な願いを意とする語を用いて、非現実(夢)の状況を強く願望させることにより、現実には叶えられぬ恋の深い嘆きを表わしたものである。なお、類歌としては「貫之集」の、

ねられぬをしひてねてみる春の夜の夢のかぎりはこよひなりけ

り
が、指摘できるが、やや難解である。恐らく、「夢で逢えることさ
今夜かぎり、明日からは季節も移り、『春の夜の夢』での逢瀬も叶え
られなくなる」という、三月尽を利用した恋の嘆きの歌と思われる。

①のびたりけるを^(お)このもとに、春行幸^②あるべしと^④ききて、
さうぞく^⑤ひとく^⑥だりてうじてつかはすとて、桜色^⑦のしたが
さねにそへて待^⑧(り)ける

77 わがやどの桜の色はうすくとも花のさかりはきてをらなむ

【校異】①しのびたりけるーシノヒテアリケル(片)しのひたる(荒)

②をんな^ア(荒) ③あるべしーアリ(片) ④ききてーきて(荒)

⑤さうぞくーさうそくを(久) さうすく(荒) ⑥ひとくだりてう

じてーてうして(雲) ひとくたりして(堀) ヒトクシテ(片) ひと

くたり(荒) ⑦つかはすとてーおくる(堀) おくりはへりける(荒)

⑧桜色のしたがさねにーナシ(雲) 桜ノシタカサネニ(片荒) ⑨

そへて侍りけるーナシ(雲) ツケル(片) ⑩読人不知アリ(雲

荒) ⑪花のさかりはー春のかさはりは(雲)

【語釈】○しのびたりけるをこのもとにー人目を忍んで逢つてい
た男の許に。この「しのぶ」は行為ではなく状態表現(→509頁
558-944頁)。この部分、次の句を隔てて「つかはす」に係る。○

さうぞくひとくだりてうじてー(行幸供奉のための)装束一揃いを
調べて。○桜色のしたがさねー淡紅色の下襲。「桜色」は、『抄』

に「一禅御説表白裏蘇芳」、『古今』春上66「桜色に衣は深く染めて
着む花の散りなむのちの形見に」の頭注には「表白裏はなだ」とあ
る。本集では他に134。下襲は、東帯の時袍・半臂の下に着、背後に
引く長い裾の部分がある(「桜の下襲いと長うは裾引きて」(『源語』

行幸)。春の桜・藤・柳等、時節に適う色目が用いられた。「今日の
御装は皆直衣の御衣ども、御供の人例の袍、桜の下襲など着たり」
(『宇津保』吹上)。

○桜の色はうすくともー自邸の桜と下襲の
色合とを懸ける。

○きてもをらなむー一首の対象が表向きは桜
であるから、「来ても折らなむ」と解される。「来て折る」は桜を賞
美する心を表象し、同時に訪れへの期待を込めている。裏の意とし
ては「着ても居らなむ」、即ち「行幸の時着用してほしい」というこ
と。

【訳】

春に行幸の予定と聞いて、人目を忍ぶ仲の男の許に、装
束を一揃い調べて送ろうと思ひ、桜色の下襲に添えまし
た、

私の家の桜の色は薄くて見所がないとはいっても、春の花盛
りには訪ねていらして、枝を折り花を賞でいただきたいも
のです(見栄えのしない衣装ですけれど、行幸の折にはお召
しになって下さいませ)。

【評】男への誘いと同時に、装束の添え文としての至極実用的な用
途も兼ねる二重構造を持つ。「折」という観点からは無論後者に重点
があるが、その「折」を利用して、「桜色」を媒介に巧みに恋歌的な
要素を詠い込めた歌であると言えよう。

ところで、歌の表面の意は、桜を表に立てた男への招請というこ
とに止まるものの、さらに踏み込むならば、「桜の色」云々にある種
の自己表現を嗅ぎ取れなくもない。しかしながら、桜を代替物とし
て措定・対象化することによって、暗に己れの意図を通じさせると
いう一方の目的は十二分に達しているのだから、その上に、「桜の色」
に二重の寓意を詠みこむ事は、技巧的に見ても不自然と言わざるを
えない。詞書の「しのびたりける」という情況規定も対世間的ニュ
アンスにおいて女の切実な誘いを歌の表現に読み取らせこそすれ、

あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり
を踏まえたものと思われる。移ろい易い花よりもなお浮華な男を譏
る女の言い様と、男自身がいささか弁解じみた言辞を弄することと
の間に、幾ばくかの距離はあるものの、花を媒介とする発想の根底
は同じものである。即ち「あだなる」花にかこつけて訪ねてくる男
はいちだんと「あだ」という認識であつて、「あぢきなく花のたよ
りにとはるれば我さへあだになりぬべらなり」(『躬恒集』)・「とはる
るにあだにはあれどこの春は花のたよりぞうれしかりける」(『六帖』
五)のように、「花のたより」という語自体が、花を機縁とした交渉
という点に、すでに「あだ」というイメージを内包しているのであ
るが、その原形質は『勢語』にあると見てよいであろう。

また、そのような背景からすると、これも単に花を求めるための
断りめいた挨拶、あるいは久瀾を叙しただけの歌と見るよりは、む
しろ、表現は婉曲ながら、言外に復縁をほのめかせていると見た方
が、詞書の状況設定にはふさわしいと言える。「花のたより」とい
う恋愛的語感の濃厚な措辞が、そういう作者の姿勢を浮かび上がらせ
ていよう。

よぶこどりをききて、となりの家におくり侍(り)ける
わがやどの花にななきそ喚子鳥よぶかひ有(り)て君もこなく
に

【校異】①ノコヘア(片) ②家一人(堀片) ③おくり侍りける
一つかはしける(中久堀片荒) ④ななきそ一なきてそ(堀) ⑤
よぶ一鳴(堀) しく(荒)

【語釈】○よぶこどりー『古今』伝授三鳥の一(「をちこちのたづき
も知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」春上29)。秘説・臆説入
り乱れ、新注でも『余材抄』などかなり詳しく考証しているが、実
体は不明。『万葉』では、卷八14191447・卷九1713・卷十182218271831が春
の雑歌、卷一70が季不明で卷十194のみ夏に置き、中古には「六月の
なこしの山の呼子鳥」(『六帖』二)・「紅葉見てかへらむ方もおぼえ
ぬを呼子鳥さへ鳴く山路かな」(『惠慶集』)等も見えるものの、大体
は春の鳥として捉えられていると思われる。人を呼ぶという見立て
は上代以来のもの。本集では恋部に多く、他に69194310341035に出る。
○よぶかひ有りて君もこなくにー「なくに」は「よぶかひ有りて君
もこ」全体を打ち消す。喚子鳥に呼びかける態であるから、「君」は
第三人称的表現と見られる。

【訳】 喚子鳥の声を聞いて、隣の家に送りました、

我が家の花蔭で鳴いてくれるな、喚子鳥よ、呼んだかいがあ
つてあの人に来てくれるということもなかるうに。

(8)

【評】喚子鳥に語りかける形で隣人の疎遠を恨んだ歌。社交上の挨拶
といつた感が強いが、人を「喚」ぶという固定化した連想と、恋
情や孤独感・寂寥感を募らせる媒介として詠みこまれる場合が多い
(『古今』29の外、『万葉』卷八14191447等)ことなどから、喚子鳥とい
う素材が当歌のような場面で要請されるのも、それなりの必然性あ
つてのことと考えられる。

① 壬生忠岑が左近のつがひのをさにて、ふみおこせて侍(り)
けるついでに、身をうらみて侍(り)ける返事に

80 ふりぬとていたくなわびそはるさめのただにやむべき物ならな
紀貫之

【校異】①壬生—ナシ(荒) ②が—ナシ(中雲堀荒) ③侍けるとき^ア(中久片荒) 侍時^ア(雲) ④ふみ—ふみを(中堀) ⑤うらみて侍りける—うらみたりける(久片荒) ⑥返事—返し(中) ⑦に—ナシ(堀) ⑧紀貫之—つらゆ□(荒)

【語釈】○左近のつかひのをさ—左近番長。近衛府は本来禁中警衛や行幸時の警護を職分とするが、実際には宮中儀式の儀仗・舞樂の務めを専らとした。左近衛府は上東・陽明門の間に在って、禁内の詰所(陳の座)は日華門の内にある。番長は左右の近衛各三百人の上位、府生の下位である。 ○ふこおこせて侍りけるついでに—用件の奥にでも書き添えてあったのだろう。「ついで」は40参照。

○身をうらみて—我が身の不遇を恨んで。19「しづめるよしをなげきて」に同じ。 ○ふりぬとて—(立身も思うにまかせないまま)年老いたからといって。「春雨」の縁で「隣り」→「古り」と措かれたものだが、むなしく人生を過ごし卑官に甘んじてきたという語感がある。 ○春雨の—「やむ」に係る枕詞。「ふり」「やむ」と共に縁語を構成する。時節が春である事を示唆しよう。 ○ただにやむべき—むなしく生涯を終えてしまふはずの。忠岑が老境にある事を前提とした言辭。

【訳】 壬生忠岑が左近番長であった頃、手紙をよくこしてきまし
た時その奥に、今の身分に愚痴をこぼしておりました、
その返事に、

はかばかしいこともないまま老いてしまったからといって、
そう悲観したものではありませんまい。このまま終わるはずの
ものでもないでしょうに。

【評】 古歌ふるかに添えた長歌の一節「照る光近きまもりの身なりしを誰

かは秋のくる方にあざむき出でて御垣より外の重もる身の御垣守」
〔古今〕雑躰1003によれば、忠岑が左近番長から「秋のくる方」つ
まり右衛門府生に昇任したのは延喜五年(965)前のことで、当然そ
れより前のものになるが、上限はいつと定められない。ただ、『俊頼
髓腦』に見える敏行との連歌は、「忠岑が右近(『俊頼口伝抄』には
「左近」)の番長にありける時、敏行の少将の」云々との事なので、
敏行が左少将であった仁和二年(886)から寛平六年(894)の間のあ
る時期に、既に左近番長であった事が知られる。

年齢については、現在は偽書説の強い「和歌体十種」の天慶八年
撰という識語は参考にならないとして、後年の忠岑の記録は延喜末
年、村瀬敏夫の考証(『紀貫之伝の研究』第四章(8))を是としても、
せいぜい延長末年あたりを下限としており、先の長歌の後半「かか
るわびしき身ながらにつもれる年をしるせれば五つの六つになり
けりこれにそはれる私の老いの数さへやよければ身はいやしくて年
高き」からも、延喜初年にはもう老齡、延長頃没したとしてもこの
頃五十歳前後には届いていたとしてもこの頃五十歳前後には届いて
いたと思われる。そう考えれば、この忠岑の訴嘆、それを受けた貫
之の慰藉もそれなりの切実味を帯びて響いてくる。のちの延喜十七
年(917)頃、甲斐にあった忠岑に、

甲斐が嶺の松に手ふる君ゆえに我はなげきとなりぬべらなり

(『貫之集』)

と真率な友情を詠み示した貫之であるが、このような場合にさえ縁
語や掛詞の技法が骨格となるところに、当時の歌がそれらをいかに
血肉化していたかが知られよう。

なお、表立ってはこの種の詠を採らない『古今』に較べれば、既
出の19と併せて、この集の包蔵する和歌世界の幅広さを窺わせる歌
でもある。